

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

書評：

落合一泰 『ラテンアメリカ・エスノグラフィティ』  
(弘文堂, 1989年)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-17 キーワード: 作成者: 鈴木, 紀 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5545">http://hdl.handle.net/10502/5545</a>

## 〈書評〉

落合一泰著『ラテンアメリカン・  
エスノグラフィティ』 (弘文堂、1989年)評者：鈴木 紀  
(東京大学・大学院)

本書は著者が1980年から、88年にかけて発表した15の論文やエッセイを編集収録したものである。テーマは多岐に渡り、著者の専門とする文化人類学を始めとして、歴史、文学、演劇といった分野が論じられており、扱われている地域も著者が長期のフィールドワークを行ったマヤ・ツォツィル語系住民の集落を中心に、メキシコ、コロンビア等に及ぶ。時代的には著者が直接ふれあったラテンアメリカの同時代に対する論考が主流をなすが、それらを過去の歴史過程の総和としてとらえる態度は一貫している。各論文はそれぞれ別の機会に異なった形で発表されたものであるが、それらを一冊の本に編集して読書に提供する目的は、既成のラテンアメリカ・イメージの問い直しと人類学の見直しであるという(14頁)。書名の「ラテンアメリカン・エスノグラフィティ」とは、この二つの野心的なねらいを込めて命名されたものであろう。

本書では「エスノグラフィティにむけて」と題された導入部に続き、3部構成で記述が進められてゆく。以下各部の内容を評者のコメントをくわえながら紹介し、最後に本書のねらいがどの程度達成されたのかを検討してみることにしたい。

導入部および第1部「民族誌とラテンアメリカ」の3編の文章において、著書は人類学の基本的手段である民族誌記述の問題をとりあげる。著者はフィールドワークをよそものが「共謀的観客化」していくプロセス(45頁)、

いわば役者に代わっていつでも舞台に飛び出していけるような積極的な観客として演劇を盛りあげていくような行為と考えている。それゆえ著者がインフォーマントと共に紡いだフィールドの「現実」は、既存の分析項目(地理的・歴史的背景, 親族組織や法と政治, 宗教 etc.)にしたがって記述していく従来の民族誌のスタイルでは充分に書き取れないという。そのため、調査結果を公表する民族誌もまた人類学者と読書との共謀関係として提示されなければならないと考える著者は、読書の反応を気にしつつ、記述のための効果的な演出方法を模索することになる。こうした発想から生じた方法が「エスノグラフィティ」というわけである。

エスノグラフィティとはある社会の生活の仔細な記述「民族誌(エスノグラフィ)」と「落書き(グラフィティ)」を結んだ造語であるとひとまず規定される(7頁)。エスノグラフィティとはモンタージュ技法を用いた民族誌(12頁)と簡潔に言い換えられ、その一つのモデルとして、引用されるさまざまな種類の言説(会話, 独りごと, 手紙, 日記, 新聞記事, 電話, 報告書など)が声のコラージュを形成するようなバルガス＝ジョサの小説が例示される。さらにモンタージュ技法は微分的接近と言い換えられ、モンタージュしていく個々の情報に対する細心の注意が訴えられる。つまり著者はエスノグラフィティという方法を提唱することで、これまで人類学者が民族誌を記述する際におかしがちであったフィールドで得たデータの部分的欠陥や歪みという問題を、細部まで詳細に書き取る努力によって克服していこうと宣言しているように思われる。

このような態度でラテンアメリカという対象に臨む著者の目に写るのは、我々がラテンアメリカと呼ぶ地域は確固とした実体を欠いており、「錯綜する部分文化がたがいに軋みあう場(28頁)」に他ならないという事実である。したがって著者は、そこに何らかの実体を想定してラテンアメリカ全体を安易に理解しようとする態度は、ともすればイメージという名のレッテルを他者に貼ってすまそうとする対話拒否の姿勢(30頁)になりかねないとして厳しく糾弾する。これにかわって著者が重視するのは、自分

と他者との対等な対話であり、そのためには他者の生活・感情・意識などの細部まで知る努力から始めなければならない(31頁)と考える。これは既に述べたように、対象に微分的接近を試みるエスノグラフィティの基本的な態度に他ならない。

第2部「時間と空間」には文化人類学関係の論文が2編収められている。一方は今日の人類学における「時間」論の概説であり、他方は著者が調査を行ったメキシコ、チアパス高地のツォツィル・インディオ社会における空間概念の分析である。前者でも著者の調査資料はふんだんに紹介され、この2編の論文には人類学者としての著者の根本的な問題意識が明示されているように思われる。それは一言でいえばある民族の集会的記憶、あるいは共通の物語像=宇宙観を感得することであろう。そのために著者がここで注目するのはツォツィル・インディオの公開儀礼である。モッチとよばれる儀礼用の祭壇をヒントにツォツィル宇宙観が読み解かれ、これがツォツィル・インディオの日常生活の空間認識を規定するばかりでなく、カーニバルの際の芸能表現において彼らの歴史認識がこの宇宙観を拠り所に表現されていることも示される。

著者はこの宇宙観をツォツィル宇宙観としてチアパス高地に限定して提示しているが、評者の調査地であるメキシコ、ユカタン地方の民族誌からもほぼ同様な宇宙観の読解が可能である。ユカタン地方ではカーニバルの際の演劇性はツォツィル社会ほど豊かとはいえず、物語像としての宇宙観が比較的色彩褪せている感は否めないが、例えば雨乞い儀礼に使用される祭壇に表現されている空間認識は、ツォツィル宇宙観のそれと極めて類似している<sup>1)</sup>。その意味で著者のモデルは両地域の基層をなすマヤ宇宙観と呼ぶこともあながち誤りではあるまい。

第3部は本書のタイトルでもある「ラテンアメリカン・エスノグラフィティ」と題され、10編の文章が収められている。これらの個々の論考自体が一定地域ないしは文化のエスノグラフィティとすることも可能だし、第3部全体をラテンアメリカのエスノグラフィティとして読むことも可能で

あろう。「声・音・祭」では音声を手掛かりにメキシコのフォークロアの一端が語られる。これは人類学研究が視覚の呪縛に陥っており、聴覚的情報が記述の際に充分に取り込まれていないという民族誌批判にもなっている。「ツォツィル民族誌点描」では著者とツォツィル住民とのフィールドにおける対話や日常的な触れ合いが紹介される。第2部で展開した学術的論考を著者の舞台演技とすれば、いわば楽屋裏の稽古風景の紹介であり、人類学にとって重要なのは単にデータと解釈の提供ばかりではなく、そこにいたるプロセスなのであるという著者の主張が読み取れる。「拒絶された理解」も同様な著者の調査活動中のエピソードである。同じ村人でありながら和やかに続く儀礼の席に参加することなく雨中に消えた3人の貧しいインディオ親子の影がいつまでも著者の脳裏から消えず、たとえ対象が一つの小集落であってもそこでの文化の一般像を簡単に理解したつもりになることへの警鐘として鳴り響く。続く「ある文化遭遇の歴史」と「オレはインディオだ！考」ではインディオの伝統性とインディオ概念そのものが解体される。チアパス高地に見られる集落間の聖人像相互訪問制度＝コンパーニャ・ネットワークは、我々にとって異質であるがゆえに伝統的とか先スペイン期的と見なされやすいのだが、そこにも歴史的に幾多の変遷がみられ、それはインディオが彼らを取り巻く環境に敏感に反応してきた結果であることが示される。また、インディオという言葉がそう呼ばれる当人たちにとって実体を欠いた概念であり、彼らが現在この言葉を用いるのは、彼らのアイデンティティの深層を省察することなく独善的に計画されたインディオヘニスモ政策の影響であるという。これはわれわれがインディオという言葉を用いる時の便宜性に反省をうながす指摘でもあろう。

以下著者はチアパス高地を離れ、他のイスパノアメリカ文化圏へとエスノグラフィティの記述を広げていく。「アラカタカ紀行」はガルシア＝マルケスの故郷、コロンビアのカリブ海沿岸地方にあるアラカタカの探訪記である。ガルシア＝マルケス自身の言葉や旅の途中でかわされた対話が効果的に配置されている。『百年の孤独』の舞台マコンドの原風景をアラカタカ

に見出した著者は、「魔術的リアリズム」と形容されることの多いガルシア＝マルケスの小説は、実は歴史文化的多層性の上に成立するこの地方の現実の仔細な描写に他ならないことを確認する。特に著者がガルシア＝マルケスを評価するのは、交錯するさまざまな視点を折り込む叙述方法であり、そうした細部にこだわりながら現実を一つの包括的なイメージとして見抜いていく姿勢である。正にこの点でガルシア＝マルケスの小説と著者のエスノグラフィティの試みは一つの焦点を結ぶのであろう。

続く「キノのおののき」ではアルゼンチンの漫画家キノが試みる実験的表現方法が紹介される。民族誌の表現を模索する著者ならではの分析であるが、具体的な民族誌記述への応用方法は展開されていない。なお載録された漫画の吹き出し部分の邦訳は秀逸である。「闘牛のドラマトゥルギー」は、スペインにおける闘牛の象徴分析をおこなったキャリー・ダグラスの論文を土台に、著者が闘牛の意味の解釈を深めた論文である。著者の着眼は闘牛を演劇的行為としてとらえる点であり、その非日常性ゆえに闘牛の場においてはダグラスの提示した象徴的構造が逆転していると主張される。著者の人類学はここでも演劇論と不可分に展開されている。

「共同体幻想と文化的アイデンティティ」はもともとラテンアメリカの民族と文化を概説する目的で書かれたものであり、著者のラテンアメリカ観が総括的に述べられている。ただし、それゆえ本書で追求してきたラテンアメリカの細部への微分的接近というよりは、ラテンアメリカに関する積分的要約という傾向が強く、必ずしも本書に載録する必要はなかったかもしれない。しかしこの文章は本書に収められた個々の論考の結果、著者がたどり着いた一つの到達点、あるいはさらにラテンアメリカン・エスノグラフィティを発展させていくための展望として読まれるべきだろう。

最後の「実在主義的バロック劇の世界」では再び演劇評論が行われる。ジョン・フォード作『あわれ彼女は娼婦』が日本とメキシコで異なる演出で上演されながらそれぞれに成功をおさめた理由が説明される。ここから読み取れるのは演劇の成功とは演技者および演出者と観客との関係性のな

かから生じる「現実」に他ならないという認識であり、それは著者が本書の冒頭で展開した演劇を隠喩とするフィールドワーク論やエスノグラフィティ論と呼応しているようである。

さて以上のラテンアメリカに関するいくつもの記述を通じて読書はラテンアメリカ・イメージをどのように問い直すことができるのであろうか。間違いなく明らかになったのは我々がラテンアメリカと呼ぶ地域の文化的多様性である。しかしこうした認識はすでに多くの研究書<sup>2)</sup>で繰り返されてきたことである。これらの書物では複数の執筆者による集団的記述によって多様性が示されていた。むしろ本書で述べられた多様性は著者の単一の切り口によって明らかにされた点が重要である。著者の切り口とは「その土地の文化が総体として滲ませているのであろう欲望や運命のようなもの(12頁)」を書き取ることである。こうした関心をもってメキシコのチアパス高地やコロンビアのカリブ海地方へでかけた著者はそれぞれの土地の集団的記憶の内容と表出様式の差異を目の当たりにする。著者はこのようにラテンアメリカの部分文化の錯綜を読書に語るための指標を明確にしておき、しかもその指標は極めて独創性の強いものである。

ところで、評者が確信をもてないのは、著者はなぜ多様で実体がないとして解体したはずのラテンアメリカの地域性にこだわり続けるのかという問題である。著者は本書の後、発表した英文、西文による既発表論文集<sup>3)</sup>のタイトルにもラテンアメリカという語を用いている。おそらく著者はラテンアメリカの文化的多様性のなかにも何らかの公分母を見いだしているのであろう。本書のなかからそれを捜そうとすれば、それは征服・被征服という事件を発端とし、諸民族、諸文化が混血混在する歴史過程のなかで絶えず自己の文化的アイデンティティを問い続けざるをえない状況の共通性ということになるのではないだろうか。評者はしかし、このような文化的アイデンティティの絶えざる探究という欲求が汎ラテンアメリカ的であるか否かを判断できない。おそらくこれは著者がラテンアメリカに直面する際の一つの予感なのであろう。こうしたラテンアメリカの公分母の存在を

予期し期待するからこそ、著者は、本書で扱われていない多数の国家や文化がこの地域にあるにもかかわらず、本書にラテンアメリカン・エスノグラフィティという題を付すことができたのであろう。もちろん評者もそのような期待を携えてラテンアメリカに接することに異存はない。

次に本書で人類学の見直しはいかになされたかを見てみよう。これは言うまでもなく民族誌記述の再検討として行われ、エスノグラフィティの提唱という結果を得た。それではエスノグラフィティという記述スタイルの試みはどれほど成功をおさめたといえるだろうか。著者は調査地での「現実」とは人類学者とインフォーマントとの関係性において生じると考え、その「現実」を記述する民族誌は人類学者の「作者性」に左右される「作品」であると割り切る(13頁)。評者は人類学者のデータに実験室の実験データのような客観性を認めるものではないが、研究者の主観的解釈が横溢する過度に「作品」的な民族誌には当惑を覚える。著者は今日の人類学がデータの固定以上の意味のない民族誌モノグラフを生産し続けている(259頁)と批判するが、少なくとも確固としたデータの提示のない民族誌を評者は信用することができない。この点で著者のエスノグラフィティは、対象に微分的に接近し細部まで書き取っていきこうという姿勢、言い換えれば作者の解釈の根拠となり読書がその解釈の是非を判断する手掛かりとなるデータを細かく盛り込もうとする姿勢が約束されているために、心配は無用であろう。しかし元来人類学はフィールドワークを唯一絶対の方法論とし、フィールドで得た多様なデータを重視してきた学問であることを思い起こせば、著者の微分的接近の提言はある意味で民族誌記述の原点回帰といってもよい。エスノグラフィティの可能性はむしろ、細部を落書き(グラフィティ)していく表現技法の追求にあるのではないだろうか。既にみたように著者はモニタージュ技法を用いた記述に活路を見出そうとしており、映像資料や聴覚情報にも興味を示している。しかしそれが具体的にどのような形で民族誌に取り込まれ、いかなる効果が期待できるのか。モニタージュで重要なのは対象を切り刻むことではなく、それらをいかに配列

し直すかという問題であろう。こうした問題は本書ではまだ理論的にも技法的にも充分追求されていないようである。それゆえ、そうした表現技法を存分に駆使した民族誌の記述は著者の今後の課題であろう。

最後に評者が著者に望みたいのは、ラテンアメリカの全域で進行中の近代化や開発にともなう政治経済的变化の影響をエスノグラフィティの手法で描出してほしいという点である。本書での著者の一つの関心は地域社会の集団的記憶の解明にあったわけであるが、こうした集団的記憶が維持されたり回復の必要が叫ばれるのは、それを脅かす諸変化が日常的に進行しているためであると思われる。著者も参照している『文化批判としての人類学<sup>4)</sup>』で指摘されている通り、世界規模の歴史的な政治経済を民族誌がどう書き取るかという問題は、民族誌あるいは人類学の大きな課題の一つである。

著者は今、舞台公演を終えた役者が観客の反応に気をもむように、本書がいかにか読まれるかを気にかけているはずである。本書は人類学者としての著者とラテンアメリカとの関係性の上に成立した「作者性」の濃厚な「作品」であるが、人類学研究者だけでなくラテンアメリカの歴史、文学等に関心をもつ者、あるいはラテンアメリカ人自身の視点への接近方法に興味をもつ者も本書の「観客」となる資格がある。そうした読者の間で本書をもとにラテンアメリカをめぐる議論が深まっていくことを評者としても期待したい。

## 注

- 1) 鈴木 紀, 1989年「マヤの四つの祭壇」『季刊民族学』50号107-114頁。
- 2) 例えば、大貫良夫編1984年『民族交錯のアメリカ大陸』山川出版社、増田義郎、山田善郎、染田秀藤編1984年『ラテンアメリカ世界』世界思想社。
- 3) Ochiai, Kazuyasu. 1989. *Meanings Performed, Symbols Read: Anthropological Studies on Latin America*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa.

- 4) Marcus, George E. and Michael M. J. Fischer. 1986. *Anthropology as Cultural Critique: An Experimental Moment in the Human Sciences*. Chicago: University of Chicago Press.

(『文化批判としての人類学』永渕康之訳 1989年 伊國屋書店)